



迷ってもいい



滋賀県に瓜生崇さんというご住職がおられます。もともと「親鸞会」というカルト教団に入信し布教活動の幹部をしていましたが、教団のあり方に疑問を持ち、脱会して真宗大谷派（東本願寺）の僧侶となりました。脱会してからは、カルト教団の元信者からの脱会相談に乗る活動を続けられています。

人は、なぜ過激なカルトに惹かれるのでしょうか？

一生懸命に生き抜いてきた人が、自分の人生は子供を育てるための人生だったのかとか、仕事をするためだけに生きてきたのだろうかとか、そういった虚しさを人生の節目で感じるのは当たり前のことである。…「生きがい」によっては埋められない、「死」へ向かう不安と空虚が生じてくる。そんなときに勧誘を受けると、人は驚くほど自然に入信してしまったりするのだ。

…教団の虚偽性にかかわらず、それを求める信者の根底にある思いは、**人間存在の根本的な意義を求める宗教心**であったことは、疑いないと思う。

『なぜ人はカルトに惹かれるのか』瓜生 崇 著より

こうした宗教心は誰にでも起こり、入信者は驚くほど「普通の人」だったりするそうです。また浄土真宗の法話でも、たびたび**人間存在の根本的な意義**を問う話は出てきます。

ではカルトの教えと、私たちのいただくお念仏のみ教え（阿弥陀様の救い）とは、いったい何が違うのでしょうか・・・？ 瓜生さんの表現を借りると、それは「正しさに依存する」か、「迷っても大丈夫」かという違いではないか、と思います。

脱会は迷っている信者を正しさに引き戻すことではない。**正しさに依存して真実を抱きしめて生きている信者が、それを捨てて迷いに帰る**ことが脱会である。信者は迷い続けて生きていることが怖いから脱会できないのだ。だから私たちが送るメッセージは「正しいのはこちらだ」ではなく、「**迷ってもいい**」である。迷うことは大事であり、迷っても生きていけると言い続けるのだ。

親鸞聖人は決して自らを「正しさ」に置くことなく、生涯「迷い」続けた方でした。阿弥陀様に抱かれた安心の中で「迷い」続ける言葉を、多く遺されています。ひとつ、ご紹介します。

「凡夫」とは、すなわち私どものことである。…私どもは真理が何たるかを知らず、身には煩惱が満ち満ちており、欲望も多く、怒りや腹立ちやねえみや妬みの心ばかりが絶え間なく起こり、正に命が終わろうとするその時まで、止まることも消えることも絶えることもない。

「迷う」ことを恐れ「正しさ」を握りしめることの危うさを、そして「迷ってもいい」人生がそのまま阿弥陀様に抱きとられる歩みとなっていくことを、親鸞聖人の言葉は教えてくれます。